

Title	過去 : タゴールと鳥
Author(s)	中川, 雅道
Citation	臨床哲学のメチエ. 2017, 22, p. 184-188
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68190
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

When in the morning air the golden harp is tuned, honour me,
commanding my presence.
—Rabindranath Tagore, *GITANJALI*.

過去——タゴールと鳥

中川 雅道

なぜ私は教育に関心を持つようになったのだろうか。自分の過去の在り方を、思い出すことはとても難しい。記憶の断片を想起しているのは、どこまでも、この私自身なのであるから。この語りが正しいのかどうか、いったい誰が確認できるというのだろうか。しかし、私はそれでも自分の記憶の断片と関わりを持つと思う。それがおそらく、自分の行う教育を反対の方向から照らすことになるはずだから。

明け方の空気に、光り輝く豎琴が調律される時、その時には私を讃え、詩の神よ、存在せよと、お命じください。ベンガルの詩人、タゴール¹は卓越した教育者でもあった。シャンティニケトンの学校を建てる際に彼が考えていたことは、おそらく少年であった時に、自分が学校で認められてこなかった経験だったのだろう。美しい旋律の詩が幾篇も遺されている中で、おなじ詩人が記した「鳥の物語」はその哀しみを湛えている。私はしかし、自分のことを考えてもいた。

「一羽の鸚鵡がいた。……国の王さまが言った。……『あの鸚鵡

¹ 私がタゴールの教育者としての軌跡を知ったのは以下の著作による。その中では、デューイやその他の哲学者たちが人文学の擁護者として、人間性の擁護者として描かれている。マーサ・ヌスパウム『経済成長がすべてか：デモクラシーが人文学を必要とする理由』岩波書店、2013年。

に学問をさずけよ』²。自由に暮らしていた鸚鵡を教育せねばならないと、王が決断する。

まっさきに取りかからなければならないのは、りっぱな鳥かごを作ることだった。……できあがった金の鳥かごがとてもみごとだったので、国じゅうから他国から、おおぜいの人びとが鳥かごをひと目見ようとつめかけた。……鳥に学問をさずけるために学者がやって来た。……「用意する書物は、ちょっとやそつとの数では足りまいぞ」³

高校に進学した時に、立派な校舎を見て、なんてすごい学校なんだと思った。巨大な校舎。どの大人に聞いても、あの学校はすごいと褒めていた。どんなに楽しいことが待ち受けているのか、無数の教科書と副教材の山を持って帰りながら、そんなことを考えていた。

すさまじい気合のもとにおこなわれている鸚鵡の勉強を、王さまはわが目でたしかめたくなった。……王さまは鸚鵡に会いにいった。……鳥を教育するために用意されたものが、鳥よりもずっと大きかったので、かんじんの鳥は見えなかった。けれども、鳥が見えなくなっただけでかまわなかったのだ。……鳥かごのなかに、鳥のえさもなかった。水もなかった。ただ、つまかさねられた書物から、紙がいく枚も引きちぎられては、ペンの先でつぎつぎと鳥の口のなかに押しこまれてゆくのだ⁴。

意味を感じるこののできない教科書のページが頭の中に刻まれていくにつれて、本当は自分が「必要ない人間」なのかもしれないという秘密を知った。担任から届くメッセージは、お前たちは良い大学になんて行けない。勘違いするな、ということだけだった。先生たちは何やら小さいボソボソした声で我々の前に現れては、消えていった。学校にいる間ずっと、なぜ自分がそこにいなければいけない

² タゴール「鳥の物語」『もっとほんとうのこと』段々社、2002年、p. 6。

³ 同書、pp. 7-8。

⁴ 同書、pp. 11-13。

のか、それだけが分からなかった。ふと気づくと、私は誰とも喋らなくなっていた。喋る必要がなくなった。家でも、学校でも何も言わなくなった。

鳥は朝の光をいっしんに見つめては、おもいつめたように羽をばたばた動かすのだった。それどころか、その細いくちばしをつかって、鳥かごの枠をくいちぎろうとしている日もあった。……「なんと、ふとどきなやつめ」……鉄の鎖ができあがった。鳥の羽も切り落とされた⁵。

本の世界に逃げ込むようになった。少なくとも物語の中に身を浸している間だけ、自分は自由だった。勉強に打ち込むようになった。ますます喋らなくなった。ある日、こんなことを思いついた。世界と自分の通路を閉じてしまえばいいんだ、と。目に見えるものは私の世界ではない。橋が落ちてしまった後は、生活は随分と楽になった。そんな中、ある場面に行き当たる。個人懇談のことだ。あるクラスメートが、担任のいる部屋に入っていく。特に仲がいいというわけでもなかった。人付き合いが苦手な彼と、人付き合いの橋を落としてしまった私が仲良くなるはずなどなかった。その彼が、担任のいる部屋から涙を流しながら出てくる。そのくらいで泣くなよと思ったのを覚えている。初め国立大学の中でも難関の大学に行くと豪語していた彼は、その後ずいぶん経って、どこかの大学のアニメーション学科に進路が決まった、とそんな噂を聞いた。

鳥は死んでしまった。……「王さま、あの鳥の教育はのこらずすべて終了したということです」……そこで王さまは命じた。「鳥をつれてまいれ、鳥を見てみたいのじゃ」……鳥はうんともすんとも言わなかった。鳥のおなかのなかで、ちぎった書物のページが、かさかさ乾いた音を立てているばかりだった⁶。

⁵ 同書、pp. 13-14。

⁶ 同書、pp. 14-16。

ちょうどセンター試験が終わったあたりだった。教室にはよそよそしい緊張感が満ちていた。私はやや教室の後ろ側の席に座っていたと記憶している。担任が教室に入る。私たちはそれを眼で追う。ふと、いつもと違う物が担任の手に握られている、と思う。花瓶だ。白い花が生けてある。ある席の上に置かれる。担任の冗談だと思った何人かが、微笑んでいる。……が死んだ、という音が耳に入る。私たちの眼は、涙を流し何らかの事情を訴える担任がいる風景を捉えている。……センター試験の前だったから、君たちには黙っていた。このクラス全員の受験に影響を与えるかもしれないから。だから、このタイミングになった。……は高層ビルのベランダから、自分が住んでいたマンションのベランダから落ちた……。遺書はなかった。どうも事故だということだった。担任は遺体の顔がひしゃげて、つぶれ、誰の顔なのかわからなかったことを泣きながら強調した。私たちは、そんな静物画の全体を、何を感じるともなく見ていた。度重なる練習の末に、何かが教壇で語られたとしても何も感じないようになっていた。そんな風にして、ある日のホームルームは終わった。その瞬間の記憶を思い出すたびに、何も感じていなかったことに愕然とする。物になってしまった自分だけがその場に残った。

外の世界にはすでに早春がおとずれて、南風が吹きはじめていた。だが、萌えいずる樹々の緑は深いため息をもらし、花ひらく森の蒼穹を悲しませた⁷。

タゴールの話の中では、自然はさらなる遠景から、ただ悲しみながら私たちを見つめている。人間の愚かな行為を非難するようにして。そして、同じように私自身も、深い、深い哀しみの中にいる。

どうやったら、鳥が鳥のままに跳びはね、歌い、そして「かご」に入れられないままに生きることができるだろう。過去の私は「か

⁷ 同書、p. 16。

ご」の中にいながら、心だけを「かご」の外に逃がそうとしていた。受験が終わるまで、受験が終わるまでと呟きながら、死へと向かう道をまっすぐに歩む。傷ついた自分の心を守るために強くなろう、強くなろうとする道へ。硬く、強ばった死の道へ。硬く、強ばった心が直面したのは、人間ではない何かだった。鳥を教育するための「学者」になることを選びとった後に、学者は考えるようになる。本当にすべきことは、自分だけが生きる道を考え出すことではなかったはずだ。かごそれ自体を解消する努力。王は人々へと強さを見せつけるために「かご」を作り、それを教育と名づけた。自分自身が「かご」を作らないためには、傷ついた自分の心や、自分の弱さ、人々の弱さに直面することが必要なのではないか。哀しみの中から、学者は無数の「かご」たちを避けて、夢見るようになる、鳥が鳥であってよく、人が人であってよい教育とはどんなものなのだろうと。私はただ、ひとりの人でいたただけなのだ、と。

(なかがわまさみち)